

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.132  
2014.9.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 -

塚本師也

### 第15回 阿玉台式土器の器種

阿玉台式土器の器種組成は、深鉢形土器が大半を占め、浅鉢形土器が少量ながら安定して存在し、他の器種はごく僅かである。釣り手土器など多くの器種で構成される勝坂式土器とは対照的である。

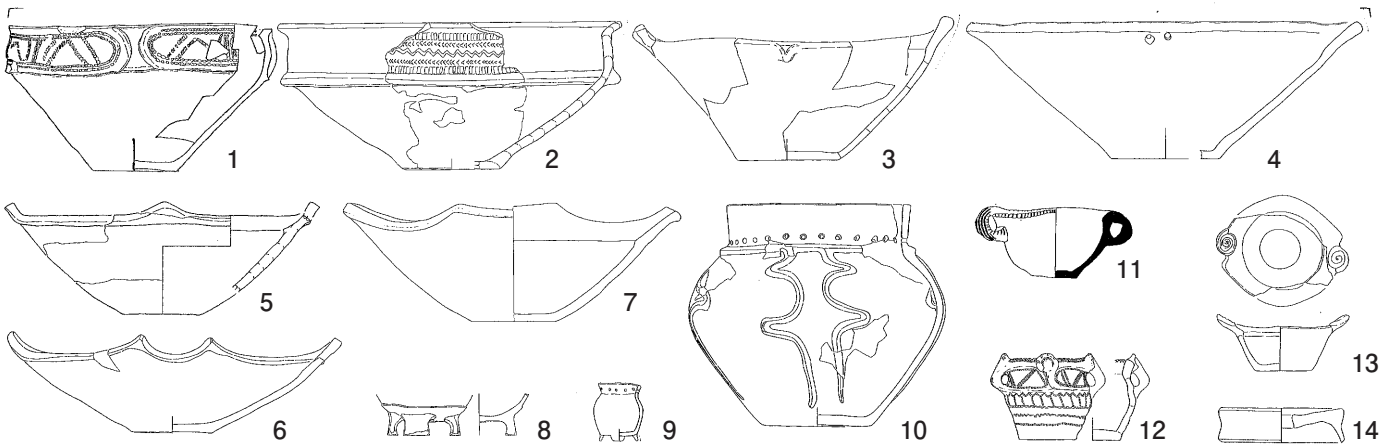
近年浅鉢形土器に対して、注目すべき研究成果が発表され、その編年や系統の概略が把握された(井出2012、日沖・福田・浅間2014)。浅鉢形土器には、内彎する口辺部に深鉢形土器と同じ楕円形区画文を配すもの(第11図1・2)と外反する無文の浅鉢(第11図3~7)の二者がある。前者はほとんどが平縁で、阿玉台Ib式~III式まで盛んに作られる。後者は全時期を通じ

て存在する。福田貫之等は、阿玉台式の無文浅鉢の系統が、加曾利E式期まで存続することを明らかにするという、大きな研究成果をあげた(日沖・福田・浅間前掲)。無文の浅鉢には、平縁(第11図3・4)と波状縁(第11図5~7)がある。平縁のものは、口縁部に深鉢同様の突起が付くものがある(第11図3)。波状縁のものには、頂部が尖るもの(第11図5)、尖った部分が双頭をなすもの(第11図6)、平坦になる富士山形のもの(第11図7)がある。同時期の勝坂式や大木7b式には発達せず、阿玉台式の深鉢形土器に特徴的な波状口縁が、浅鉢形土器にも存在する。

中部高地の勝坂式に特徴的な有孔鏝付土器が、僅かながら存在する(第11図9・10)。勝坂式のものとは異なり、阿玉台式独自の形態である。深鉢形土器の体部懸垂文を配した例(第11図10)もある。有孔鏝付土器と関連すると思われる四足土器もみられる(第11図8)。器種として独立させるべきか問題があるが、口縁部両側に環状把手が付く、壺形や椀形に近い小形の土器(第11図11・12)や小形の鉢形土器(第11図13)も少数存在する。

大木7b式で発達するミニチュア土器はあまり見られない。

第11図



1. 千葉県藤立遺跡 2. 茨城県堀米A遺跡 3. 千葉県東・北長山野遺跡 4. 茨城県大谷津A遺跡 5. 群馬県三原田諏訪上遺跡  
6・8・10・14. 千葉県大松遺跡 7. 栃木県槻沢遺跡 9. 茨城県大境遺跡 11. 千葉県布瀬貝塚 12. 東京都神谷原遺跡 13. 栃木県三輪仲町遺跡

縮尺:1/10

## 【参考文献】

井出浩正、2012、「縄文時代中期中葉にける浅鉢形土器—阿玉台式土器に伴う浅鉢の様相—」  
『史観』第168冊、早稲田大学史学会  
日沖剛史・福田貫之・浅間陽、2014、「北関東における中期浅鉢形土器の様相」  
『第27回 縄文中期浅鉢形土器の諸様相』縄文セミナーの会

## 【出典】

1. 遺跡研究会、1982、『遺跡研究論集』II 2. 東海村、2013、『堀米A遺跡(第3・4次調査)』  
3. 千葉県山武郡横芝町教育委員会、1990、『東・北長山野遺跡』  
4. 財団法人茨城県教育財団、1984、『大谷津A遺跡』  
5. 赤城村教育委員会、2005、『三原田諏訪上遺跡III—縄文時代中期編—』  
6・8・10・14. 財団法人千葉県教育振興財団、2011、『柏市大松遺跡 縄文時代以降編1』  
7. 栃木県教育委員会、1980、『槻沢遺跡』 9. 財団法人茨城県教育財団、1986、『大境遺跡』  
12. 八王子市栢田遺跡調査会、1982、『神谷原II』 13. 栃木県教育委員会、1994、『三輪仲町遺跡』

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

## 目次

- 阿玉台式土器 阿玉台式土器の器種 塚本師也 …1  
■考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第17回) 渡辺 誠 …2  
■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第125回) 榊原滋高 …3  
■考古学者の書棚 『浄光明寺敷地絵図の研究』 大三輪龍哉 …4

## 考古学の履歴書

## 良き師・良き友に恵まれて(第17回)

渡辺 誠

## 21. 縄文海進によって埋没した先刈貝塚

東海貝塚群の仕事始めは、知多市先刈貝塚の研究と報告書作成の手伝いである。ここは山下勝年氏によって発見されたのである。現在名鉄の知多新線とよばれる、終点の内海駅付近の工場現場の黒色土の排土のなかから、同氏が大量の土器片と貝類などを発見し採集されたのである。私の京都時代に時々同氏から電話があり、名鉄にできるだけ協力してもらい、ボーリング資料を提供してもらうことが大事であると申し上げていた。

名古屋に来て、その報告書作成の協力をすることになったが、土器屋ばかりの東海地区ではそうならざるを得なかった。そして名古屋大学文学部地理学教室の井関弘太郎先生を中心に、古文化財科学会のメンバーである神戸市立教育研究所の前田保夫先生や神奈川県立博物館の松島義章先生などに加わって頂き、詳細が判明した。

その成果の中で特筆されることは、現地表面下13mにある埋没波食台に貝塚があり、その上に縄文海進による海成の砂層と泥層が堆積している。すなわち縄文海進によって埋没した遺跡のはじめての発見となったことである。

氷河時代の後の海水面の上昇は世界的な現象であり、ヨーロッパなどではフランドリアン海進とよばれ、縄文海進もその一環であるが、はじめにこのことに気づいたのは、江坂輝弥先生である。きっかけとなったところの地名をとり、最初は有楽町海進とよんでいたが、すぐに縄文海進へと転換されていった。大阪の梅田海進を研究された前田先生に、最初に縄文海進と言われたのはどなたかと聞かれ、すぐ恩師のお名前をあげることができ、いささか誇らしかった記憶がある。

理論的には明らかであっても、フランドリアン海進で水没した遺跡が明らかにされたのは、世界中で今でも先刈貝塚のみである。いい仕事を手伝わさせて頂き、山下先生や諸先生には感謝している。

松島先生は貝類研究の大家である。後に古墳時代の東海市松崎貝塚の調査においても、大変お世話になった。ここではハマグリなどの大型貝類に混じり、直径2mmにも満たない超小型貝類が多量に検出された。なんだかさっぱり分からない。そこで神奈川県立博物館へ松島先生をおたづねしたところ、ウズマキゴカイであり、アマモという海藻にびっしりついているものであると、教えて下さった。こんな細かいものを、水洗選別で何万粒も検出してくれた学生諸君には、今でもとても感謝している。その結果古代の製塩技術が明らかになったことはありがたいことであった。この貝塚は愛知県埋蔵センターの福岡晃彦氏らによって発掘され、自然遺物は私に任されたのがラッキーであった。いい機会を与えてくれた福岡氏にも感謝している。

それまで古代の製塩について、製塩土器で煮詰めていたと もっともらしく言われていた。しかし大量のウズマキゴカイは

ほとんど火を受けているのに対し、他の貝類はほとんど火を受けていないことからみても、アマモが大量に焼かれ、その灰を煮詰めて塩をとることが明らかになったのである。大釜で煮て塩分濃度を高め、最終的にいわゆる小型の製塩土器で結晶化させるのである。製塩土器が粉々になっているのは、結晶化する時の膨張エネルギーによるものだといわれているが、これも間違いである。固まった塩を汚さずきれいに取り上げるために割るのである。このことはこれで終わる。

ただ松島先生が、本誌にも連載されている考古学者の神村透先生の弟さんであることは、案外知られていない。外見は文学青年と現場の親分と見えるほど違うが、優しく教えて下さることは、やはりご兄弟なのだなあとおぼされたのである。

## 22. 篠島の神明社貝塚

三河湾の入口には、佐久島・篠島・日間賀島という三河三島が位置している。先の先刈貝塚を南に下った知多半島の先である。このうちの知多市篠島にある神明社貝塚も、山下勝利氏によって一部の破壊が気付かれたのであるが、これには初めから発掘に参加し、自然遺物や骨角器を担当した。縄文後期の貝塚で、漁具が特徴的であった。鹿角製の回転式離頭銚・固定式銚・釣針などは東北・関東地方より南下したものであり、かつマグロ・カツオ・マダイなどの外洋魚をとるための漁具で、東海貝塚群にはこれらの漁具はきわめて少なく、もともと東日本の漁具を調べてきた私にとっては、愉快でたまらなかった。

この他知多市の二股貝塚・林ノ峰貝塚や蒲郡市の形原貝塚・月田貝塚の発掘に参加したが、これらは自然遺物の分担当が求められたものである。そのなかにあって岐阜県海津市庭田貝塚・羽沢貝塚の発掘は、私の責任下で行われた。いずれの場合も地元の先生方との交流があり、今日まで続いているのはありがたいことである。

もちろんこの間岩手県の大洞貝塚をはじめとして、いろいろな所へ行ったが、やはりその機会に周辺の遺跡や遺物を広く沢山みることは大事なことであり、年をとるとともにますます痛感している。

## 略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる  
 昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業  
 昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学  
 昭和43年3月 同上大学院博士課程修了  
 昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務  
 昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授  
 平成元年4月 同上教授  
 平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授  
 平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)  
 平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

## U レーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 125

#### 五月女菀遺跡 ～ 青森県五所川原市

—— 榊原 滋高

私が発掘調査に携わることになった五月女菀遺跡は、本州最北端の青森県、津軽半島西海岸の岩木川河口に広がる十三湖北岸にあります。十三湖は西側で日本海に通じていることから、海水と淡水が混じりあった汽水湖となり、全国有数のヤマトシジミの漁獲量を誇っています。遺跡周辺は冬季の季節風と同じ方向にのびる縦列砂丘が発達し、厚い砂丘砂が堆積する立地環境にありました。遺構や遺物は、砂丘の形成休止期を示すクロスナ層中に認められ、それらは新期（平安時代以降に堆積）の最大3mに及ぶ砂丘砂に厚く覆われてパッキングされていたことから、盗掘を受けながらも遺跡が極めて良好に残されていることが判明しました。

平成22～24年度にかけて土砂採取工事に伴う緊急発掘の結果、縄文時代のマウンドを伴う土坑墓群が出現し、さらに土坑墓群が大規模な環状に巡ることが明らかとなり、注目を集めました。その後、遺跡の保存運動に発展し、平成25年度には保存目的の範囲確認調査に切り替わり、調査が行われました。

遺跡は縄文後期後葉から晩期後葉（十腰内V式～大洞A式）、奈良時代（8世紀）、平安時代（10世紀前半）の複合遺跡ですが、その多くは縄文時代晩期の亀ヶ岡文化期が中心です。

縄文時代の後期後葉（約3500年前）から土坑墓が造られ始め、晩期後葉（約2500年前）までの約1000年間にわたって連綿と土坑墓が造られていたことが判明しています。

これまでに土坑墓170基ほどが確認されています。その分布をみると、最大のは丘陵頂部を取り囲むように、南北40m×東西60mの範囲にわたって、環状（馬蹄形状）に土坑墓群が巡っている様子が明らかとなりました。また、墓域に至る参道と思われる道路状遺構1条も確認されています。特に環状土坑墓群の中に黄色粘土を盛ったマウンドを伴う土坑墓の事例が多く確認されたことで、墓の上部構造が非常に良く分かる事例となりました。また、これまでに6体の埋葬人骨が発見されたことに加え、土坑墓には墓標とみられる自然礫を伴うもの、内部に赤色顔料（ベンガラ）を伴うもの、底面に周溝を巡らすもの、幼児墓とみられる埋設土器などがあります。さらに副葬品とみられるものにヒスイや緑色凝灰岩の玉類、小型壺形土器、耳飾り、石鏃、サメ歯を伴うものが確認されており、土坑墓のあり方も多種多様であったことが分かります。

また、捨て場遺構は土坑墓と重複して発見され、ここからは日常的に使用される多量の土器・石器に加え、土偶や土面、石棒などの祭祀遺物、ヤマトシジミの貝塚に伴ってイヌ・イノシシ・シカ・キツネ・クジラなど多種多様な獣骨や魚骨、ヘアピン（髪飾り）や漁猟に使用した離頭鉞などの骨角器、湿地環境の場所からは漆漉し布、木胎漆器など貴重な自然遺物も多く発見されています。

さらに、直径5.5mの円形の範囲に、人頭大の自然礫や石皿の中に拳大のくぼみ石やくびれ石や雨だれ石と呼ばれる奇抜な形をした自然礫を廃棄した集石遺構が確認されています。集石に混じって破損した土偶片、石棒片、注口土器片など男女



▲ 埋葬された縄文人骨

にかかわる性象徴遺物が多数出土しており、縄文晩期中葉の祭祀遺構と考えられます。

注目すべきは、土坑墓が造られた約1000年という長期間にもかかわらず遺跡内に竪穴住居跡は一軒も見つかっていない。五月女菀遺跡に暮らした縄文人の集落がどこにあったのか、まったくの不明であり、五月女菀遺跡は埋葬や祭祀が行われた送り儀礼の場所であったと考えられます。

また、出土遺物で特に注目されたのは「人面付き土器」です。その大きさは幅12cm、高さ7cmで、額の上半部は欠損しています。「遮光器」と言われる大きな楕円形の目を持ち、鼻が立体的で、口端に刺青と思われる刻み目があります。表面にはベンガラの赤色顔料が全体に塗布されています。形態は浅鉢形土器そのものであり、土器の底面に顔が表現されているため、自立することができません。従って、マツリの際に回し飲みで使用された祭器なのであろうかと想像されますが、亀ヶ岡文化の中でも異彩を放つ一品と言えるでしょう。時期は縄文晩期中葉です。

このように、五月女菀遺跡では、砂地に掘られた土坑墓上部の盛土が黄色粘土のためマウンドの認識が容易であったことに加え、厚い飛砂層によって保護されていたという好条件が重なり、土坑墓の多くにマウンドが伴っていたことが確認できました。これは亀ヶ岡文化の、ひいては縄文文化の墓地景観に対する見方を大きく変える大きな発見と言えるのではないのでしょうか。



▲ 人面付き土器

また、丘陵頂部を取り囲むように、土坑墓による集団墓地が形成され、環状（馬蹄形）に分布している配置の様子については、縄文晩期の社会構造が反映したものと考えられます。

今後、土坑墓や副葬品など出土遺物の分析を深めることで亀ヶ岡文化期の社会構造の解明に繋がっていきたいと思います。

## 考古学者の書棚

### 「浄光明寺敷地絵図の研究」

大三輪龍彦編／新人物往来社（2005）

大三輪 龍哉

父が編者を務め、筆者自身も執筆し、なおかつ自分が住職を務める寺に関する本をここで選ぶのは手前味噌なようで少々気が引けるが、実際に今現在の筆者の主要な研究テーマにおいては基本文献であり、最も頻りに書棚から取り出す座右の書であるのでここに紹介することをご容赦いただきたい。

本書の主題となっている「浄光明寺敷地絵図」とは、鎌倉幕府滅亡直後に寺領安堵のために作成された絵図である。鎌倉市内の泉谷という谷戸に所在する浄光明寺の伽藍を中心に描き、寺周辺に屋地を構えていた武士達の名が記載されるこの絵図は、中世都市鎌倉の内部の様子を具体的に伝える稀有な史料といえよう。

平成12年（2000）の冬頃であったかと思うが、父が嬉々として帰宅し、筆者の目の前でこの絵図を広げた時の様子を今でも記憶している。この絵図は浄光明寺に残る近世の什物帳には記載されていたものの、明治の初め頃の無住時代に行方不明となっていた。しかし、それがたまたま近所の旧家で大切に保管されていたことがわかり、交渉の結果、快く寺に返還していただけたのがこの時であった。初めてこの絵図を目にした時、筆者はこの薄汚れた絵図が凄いものだということはわかったものの、そこに内包される史料的価値の割さえも気付くことができなかつたように思う。

さて、前置きが長くなったが、本書はそのような絵図について、文献史学、美術史学、建築史学、考古学の各分野から論じたものであり、構成については以下の通りである。

#### 第一部 解説「浄光明寺敷地絵図」

絵図が伝える浄光明寺の中世の景観 大三輪龍彦  
「浄光明寺敷地絵図」に記された人物は誰か 石井進  
絵図の風景—絵画的観点からの考察 岩橋春樹  
建築的観点から考察した「絵図」

—火災を経て再建された禅宗系寺院 鈴木亘

#### 第二部 発掘 浄光明寺

阿弥陀堂平場の発掘調査 宮田眞  
経塚の発掘調査 宮田眞

付論 鎌倉時代の浄光明寺 大三輪龍哉

第一部では、絵図が描かれる歴史的背景や美術史的観点からの史料論について大三輪龍彦や岩橋氏により論じられるとともに、その描写や記載事項等から研究視点が明確化されている。それを大別すれば、一つにはミクロな寺史的研究視点である。寺院の過去の景観というのは文献史料や考古学的調査

遺跡は現在、赤土で覆い保護されています。そして、この貴重な文化遺産をどうやって引き継ぎ、保存と活用を図っていくか、大きな宿題となりました。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは布施和洋さんです。

によって伽藍配置等についてある程度は明らかにすることが可能であるが、現存しない伽藍の建築様式を知るには絵図史料に勝るものは無い。鈴木氏の論考はまさにそれを如実にあらわしている。

また、もう一つの研究視点はマクロな都市的研究視点である。中世の政権都市である鎌倉に関しては、文献史料も豊富であり、なおかつ発掘調査の成果も年々積み重ねられているが、都市鎌倉内部の地割や実際の土地所有者を明らかにすることには限界がある。ところが、石井氏の論考ではそれらの問題を文献史料と絵図との対比により可能な限り明らかにしている。

そのような第一部に対し、第二部では将来に向けた研究の可能性が示される。宮田氏による浄光明寺境内の二編の発掘調査報告は、この絵図の描写の正確さを証明するとともに、絵図史料と考古学との融合がいかにも有効な研究手法であることを明確に物語る。

阿弥陀堂平場の発掘調査は、絵図が発見されるより13年も前に実施されたものであるが、その際、確認された建築遺構は絵図に記載された建物と見事に一致していた。また、鎮守社改築にともなう経塚の発掘調査で出土した常滑の大甕は、絵図が無ければ単なる用途不明の据え甕とされていたところであろうが、絵図の記載から、それが経塚の外容器であることが判明している。

このように、本書によって「浄光明寺敷地絵図」の史料的価値は大いに高められた。ちなみに、付論として拙稿も収められているが、これは本書の理解を深めるために浄光明寺の歴史の一端を記した言わばオマケであり、言い換えれば本書が出版される以前において筆者がこの絵図そのものに対して何の研究視点も有していなかったことを表している。そして、その後も自分がこの絵図の研究をするとは全く考えていなかった。

ところが、いつの間にかこの絵図は筆者の主要研究テーマの一つとなった。浄光明寺の近隣では本書の出版以後も発掘調査が行われており、さらにこれからも行われていくことであろう。また、絵図と文献史料との対比によっても新たな知見が生まれてきていることから、この絵図を巡っての学際的研究は今後も進んでいくことになりそうである。

絵図および本書を父の形見と思ひ、引き続き研究活動に勤しんでいきたい。

### アルカ通信 No.132

発行日 2014年9月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : <http://www.aruka.co.jp>